

五、イギリス文学とハレー彗星

(イ) イギリスの文豪とハレー彗星

『キャンタベリ物語』の作者ジョフリ・チョーサーは、一三七三年ハレー彗星の現われた時は、三十三歳という働き盛りであった。

沙翁が、一六〇七年、四十三歳という働き盛りに、四大悲劇の一つ『リア王』上演の登録がなされた時、ハレー彗星が地球上から見えたという。

『失樂園』の作者ジョン・ミルトンは一六〇八年の生れだから前記彗星の現われた翌年であった。

スコットランドの田園詩人ロバート・バーンズは前記一七五九年の生れだが、当歳だったので彼の眼には入らなかったであろう。

バーンズ同様、詩人として、また歴史小説家として国民のアイドルだったサー・ウォルター・スコットは一七七一年に生れ、一八三二年に歿しているの、一七五

九年は勿論、ハレー彗星は見れなかったし、次の機会一八三五年は彼の死後三年目だったので駄目だった。

十九世紀の桂冠詩人ウィリアム・ワーズワースは自然を最も愛好した詩人としてわが国でも国木田独歩や島崎藤村等に影響を及ぼしているが、一七七〇年に生れて一八五〇年に死去しているので、一八三五年、彼の六十五歳のときハレー彗星を見ることが出来たかも知れぬ。

ワーズワースと同時代のサミュエル・テイラー・コウルリッジは、ワーズワースより一年後、一七七一年の生れだが、一八三四年に亡くなったので、その翌年に出現したこの彗星を見ることは出来なかった。

熱血詩人バイロン卿は、誕生が一七八八年で、逝去が一八二四年だから、コウルリッジ同様、一八三五年のハレー彗星を見ることは不可能だった。

これに反して、トマス・カーライルは欧州全土を席巻した奈翁の活躍する『フランス革命史』の著述で有名であるが、一七九五年の生れで一八八二年まで生存したので、一八三五年ハレー彗星が地上から見ることの出来たときは彼は四〇歳という

働き盛りであった。

また十九世紀の桂冠詩人、アルフレッド・テニソンは一八〇九年に生れて、同九年に歿しているので、三五年のハレー彗星は見る事が出来た筈だ。彼は二十六歳になつていたから。

テニソンと同年生れのチャールズ・ダーウィンは一八八二年まで生存したので、二十六歳のときハレー彗星が見れた筈だ。彼は博物学者で進化論者だったからハレー彗星の七十六年の周期位は知つていただろう。

ジョン・スチュワート・ミルはテニソンやダーウィンよりも三つ年上で、一八三五年のハレー彗星は二十九歳のとき見たであらう。

『二都物語』の作者として有名なチャールズ・ディケンズやテニソンと対照的な詩人としてイタリーを第二の郷里としたロバート・ブラウニングはディケンズと同年の生れで、共に二十三歳のときにこの髪の毛の長い空飛ぶ魔女を見たかも知れない。

米国から帰化した小説家ヘンリ・ジェイムズは一八四三年生れであるから、一九一〇年に現われたハレー彗星は彼が六十七歳のときに見ることが出来た筈である。

若し病気でなかったとしたら。彼は一九一六年に永眠した。

アイルランド生れの文学者、禅僧的な社会主義者としてヴィクトリア時代の偽善的なモラルを排した、見るお芝居よりも考える演劇を主張したジョージ・バーナー・ド・ショウは一八五六年に生まれ一九五〇年に亡くなったので、彼が一九一〇年のハレー彗星を見たのは五十四歳のときであった。

このショウより十一歳若かったジョン・ゴウルドワージーは前記彗星を見たであろう一九一〇年は彼の四十三歳のときであった。

評論家のハーバート・ジョージ・ウェルズが前記の彗星を見たのは彼の四十四歳のときだった。

以上の記述は勿論確証のあるものではない。

沙翁作『ジュリアス・シーザー』第二幕第二場で、シーザーと妻キャルパーニアとの対話で次のような科白のやりとりがある。（福田恆存訳）

キャルパーニア「非人が死ぬまえに、彗星が現われなどいたしませぬ。天は王侯の死を知らせようとして焰を吐くのです」。

シーザー「臆病者は現実の死を迎えるまでに何度でも死ぬものだ。勇者にとって、死の経験はただ一度しかない。世の不思議はいろいろ聞いてきたおれだが、何が解らないといって、人が死を恐れる気持くらい解らぬものはない。死は、いわば必然の終結、来るときにはかならず来る。それを知らぬわけでもあるまいに」。

このキャルパーニアの科白で「彗星が現れなどいたしませぬ」とあるのは、彗星の現れたことを意味している。

クロメリンの研究によると、西暦一〇六六年は英国史上特筆すべき年である。

『ヘンリ四世』第一部第三幕第二場

王 ああ神よ、どうか御勘弁下されますよう！——だが、一体、どうしたというのだ！ ハーリー！ 先祖代々曾て例のない奇怪な方角へばかり心を飛ばすというのは？ 議会に於ける職権もお前は彼の粗暴な一挙の為に失って、今は弟（クラレンス公）がお前に代っている。のみならず、王族も、廷臣もお前とは交際しない。誰もお前の将来には絶望してしまっている。一人として、もうお前は駄目

だと思つていない者はない。思うに、予^わとしても、若し妄に民衆に接触して面^{おも}を見知られ、平凡な、安価な者とされていたなら、輿論が予に王冠を戴かせるようなことはなかつたでもあろう、彼等は依然として故^{もと}の王冠の持主に忠勤を尽くし、予は何等の名声も、位もなく、出世しそうにない男として、外国に放浪していたでもあろう。ところが、稀にしか顔を見せなかつたので、動けば則^{すなわ}ち彗星の如く、世人が駭^{おどろ}いて詠^{なが}めて、其子供らに對^{むか}つて「彼^あれが其人だ」と言った。或いは、「え、どこに、どれがボリングブルックだ？」などと叫んだ。

『ヘンリ六世』第一幕第一場

ベッドフォードの公爵（慨然と天を仰いで）ああ、天に黒布を懸けて、白昼を暗夜とせい！ 汝、時局の変を知らずる彗星よ、汝の燦く縮れ髪を振乱して、王ヘンリの死を早めることに携わりおつた悪逆な星どもを答打ってくれい！ 名が余り高かつたために、命の短かつたヘンリ五世王！ ああ、イングラントは未だ曾て彼の如く偉大な王を亡つたことはなかつた。

『ヘンリ六世』第三幕第二場

チャールズ、ドイフィン仏世子、後にフランス王 ああ、どうか其火が復讐の彗星のように輝いて、敵がこゝろと悉く滅亡する前兆となってくれ。

イギリス文学と関係の深い米蘇の二大文豪マーク・トウェインとトルストイについて、一寸補足すると、前者は、『王子と乞食』や『トム・ソーヤーの冒険』等わが国の少年少女に喜ばれた作家であるが、後者は、当時のわが思想界に大きな影響を与えた。特に、白樺派の有島武郎や、『自然と人生』という随筆や、映画化されて、当時の善男善女の紅涙を絞った大衆小説『ねもとぎす不如帰』等で有名な徳富蘆花達とも交遊があったようだ。それに、わが新劇の「沢正」こと沢田正二郎と松井須磨子所演の御馴染み『復活』という芝居で須磨子が歌った例の「カチューシャ」の歌が、わが国の津々浦々まで流れたことは御存知でしょう。

最後に、この両文豪の略歴を御参考までに記すと――

トルストイ伯（一八二八——一九一〇）

ロシアの文豪レフ・トルストイは、ピーター大帝のときに貴族となった由緒ある家柄の出で、ツォラ州のヤスナヤ・ポリャーナで生れた。

彼は幼い頃、母を失い、また、八歳のとき父と死別した。

一八四三年カザン大学に入学したが、クラスの軽薄な金持の息子達の生活態度に憤慨して中退。

一八五一年コーカサスへ行き、軍籍に身を投じ、陸軍将校となり、一八六三年に出版した小説が『コサック』である。彼が出版した初期の作品は、主として少年時代の自伝であるが、当時からその文学的才能が認められていた。一八五四年に出た『セバストポール物語』は彼が従軍したクリミヤ戦争についての個人的印象に基づくものであった。これらは、『戦争と平和』という傑作の予備的作品であった。

聖ペテルブルグで数年を暮し、二回の外国旅行の後、トルストイは行政長官として自分の領地に落付き、農民救助の問題に関心をもち、一八六一年から同六二年の間に、ヤスナヤ・ポリャーナで農民の子供達のために学校を経営し、教育評論を出

版したりした。

一八六二年彼は結婚した。これは彼の生活と仕事の第一期における終末となった。これは農民に対する酷しい義務観念への内面的進歩の時期であった。彼の優れた短篇物の中にはこの期に属するものが多い。

一八六五年から六七年に亘って書かれた『戦争と平和』と、一八七五年から七六年の間に書かれた『アンナ・カレーニナ』はトルストイの二大小説で、第二期の所産である。前者は奈翁戦争を描いた最高の芸術作品で、ロシアの内面史を記した叙事詩で、ロシア国民の心理をよく反映している。

後者はトルストイの生活が第三期に移行したことを示している。即ち個人の情熱がきびしい内面的義務とぶつかっている。女主人公の運命は、外面的事件よりも内面的な勢力と衝突する結果である。

この小説の本質は、内面的義務の意識を奪われた生活に対する熱烈な反抗である。トルストイの内面的危機は一八八一年になって到来した。彼は一時内面的絶望に陥入ったが、キリストのお教えに平和を見出し、「神の王国は汝の内にあり」、即ち

「神は愛なり」そして人生の意義は、愛の原理に適合することだという彼の新しい信仰の根本的原理を展開した。

彼の道徳的で宗教的教義を含む主な作品は『我が告白』、『人生論』、『私の信ずるもの』、『神の王国は汝の内にあり』、『四福音書』等。

トルストイは自分の教義に自己の生活を殆んど合致させ、それを簡素化して、農民の生活に調和させた。彼は最後に自分の安楽な家庭を捨て、農民の間に隠れ、一九一〇年十月二十八日旅立ったが、病に斃れ、十一月七日、駅で死去した。

マーク・トウェイン（一八三五——一九一〇）

マーク・トウェインはクレメンスの雅号で、ミシシッピ河通いの汽船が、水深を測るとき使用した二尋ふたひろの意味である。これは以前老齡の水先案内人が使ったものだ。彼の名はアイザイア・セラーと言い、ニュー・オーリンズ・ピカユーン紙に寄稿したおおげさな記事に署名するために使用されていた。

さて、サミュエル・ラングホーン・クレメンスはミズリー州、フロリダに生れ、

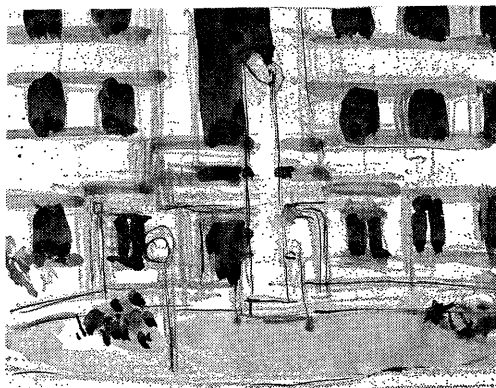
開拓者精神の旺盛なヴァージニア人の息子であった。

『トム・ソーヤの冒険』とか『ハックルベリー・フィンの冒険』は、父の感化を受けて育った青少年時代の思い出である。また一八五六年南米で儲け口を捜そうとしたが、ミシシッピー河で蒸汽船の水先案内人になることを選んで、南米行を断念した。彼はこの仕事が自分の生涯中、最も重要な鍛練の場だと考えた。

独立戦争が始まると、この河の汽船が航行を中止したため、彼は短期間南軍において軍事訓練を受けた後、兄と共にネヴァダへ行つた。この間の苦勞や、その後、西部への旅や、鉱夫として働いたり、また、ジャーナリストとして経験した冒険談を記している。

一八六二年ヴァージニア市民新聞社員となり、マーク・トウェインの筆名を以て開拓者の伝統である諧謔的雑文を書き始めた。彼の作品を激励してくれる人々に逢う機会が出来、サンフランシスコではブレット・ハートと協同してあの有名な『カラヴェラスの飛び蛙』（一八六五年）を書いた。これで忽ち認められるようになった。

彼は東部への講演旅行、地中海や聖地への旅行記をもって主要作家としての地位を確保し、古典や古風なものに対して米国人特有な見解を表示した。



田辺謙輔画

(四) 十字軍とリチャード一世

凡そ宗教戦争ほど惨忍なものはない。聖地回復と称して企てられた十字軍の如きは、露骨な感情の衝突であり、目的のためには手段を選ばぬ暴挙であった。

英仏聯合の十字軍も、その代表たる指導者の性格の不一致が作戦行動の失敗を招き、結局、徒勞に終らざるを得なかった。

特に、イギリス王リチャード一世は、蛮勇を以て聞えた英雄ではあったが、円満なる解決に導く思慮ある政治家の素質に欠けていた。

彼が猶^{ユダヤ}太人を憎み、虐待したことは有名だった。その憎悪がこの聖戦の火に油を注いだとも云える。

リチャードがこの聖戦を理由に、四年間も祖国を留守にして政務を怠ったことは全く狂気の沙汰だという非難は免れない。換言すれば、彼は冒険好き、単なる荒唐者だったようだ。その点では、父ヘンリ二世とは大違いだった。

J・R・グリーンの『英国国民小史』の中で、リチャード一世に対する批評は極めて酷しい。

チャールズ・ディケンズの『子供のための英国史』の中で、リチャードの猶太人迫害の話が屢々出て来る。ディケンズ一流の多少誇張した表現でもあろうが、割引しても暴挙であったことは事実だ。

ヨークにおいて、多数の猶太人が、自分達の妻子が眼の前で殺された後、その土地の城主の留守に、その城内に逃げ込んだ。その後、城主が立ち戻って、入城をもとめたところ、猶太人達は、「もし一寸でも門を開いたら、直ぐ暴民がなだれ込んで来て、私達を殺すでしょう」と答えたということが記されている。

兎に角、この城主との対話から、如何に、当時猶太人が迫害されていたかが想像され、前記の如く、リチャードは、この聖戦の結末をサラセン王と一応は纏めたが、オーストリアを通過して帰国の途次、捕えられ、ドイツの城に幽閉され、多額の賠償金を支払って帰国することが出来た。

けれど、その後、ある地区の反乱軍鎮定のために遠征した際、流れ矢に当って落命した。全く数奇な運命の王様だった。

(ハ) 百年戦争とジャン・ダーク

百年戦争は、英仏の百年に亘る紛争で、西暦一三三八年から一四五三年まで続いた。

英国では、エドワード三世からヘンリ六世の御代にまで及ぶ長期の戦乱で、シエークスピアの国史劇(クロニクル・プレイ)では、アジンコートにおいて輝しい戦勝を博した英雄ヘンリ五世の活躍と、『ヘンリ六世』では、敵ながら天晴れな活躍をしたジャン・ダークのことが印象的である。

名君ヘンリ五世が夜間、単身、戦線を巡視して、将士のためにその無事を祈る黙禱の場面は正に圧巻である。

『ヘンリ六世』においては、女性の身を以て英将タルボット父子との挑戦振りは、この芝居での見所であろう。

筆者は一九二四年(関東大震災の翌年)の秋に、米国シカゴ大学のサマー・エキステンション(夏季講座)を終って、英国に渡り、ロンドン大学で音声学の勉強を始めた頃、G・B・S(ジョージ・バーナード・ショウ)の“St. Joan”(ヤント

・ジョーン）を観劇した時に、この芝居が已に六カ月以上の長期に亘って、尚大入り満員を続けている盛況を見てびっくりした。

元来、ジャン・ダークは、オルレ안의少女として知られ、フランスでは、救世主として聖列に加えられた人物である。

その彼女が、シェークスピアの『ヘンリ六世』では、憎むべき小鬼か魔女の如く嫌われた人物であるが、ショウの作では、最後に敵軍の手に渡され、極刑に処せられるのであるが、その処刑に至るまでの裁判が延々と続く間に、ショウ一流の宗教論が展開され、見る芝居というよりも聴く芝居、そして考える芝居になっている。

彼の近代劇は、ヴィクトリア時代の単に眼に訴える勧善懲悪劇から脱皮して、頭脳を働かせる思想劇になっている。

坪内逍遙訳『ヘンリ六世』第一部の緒言

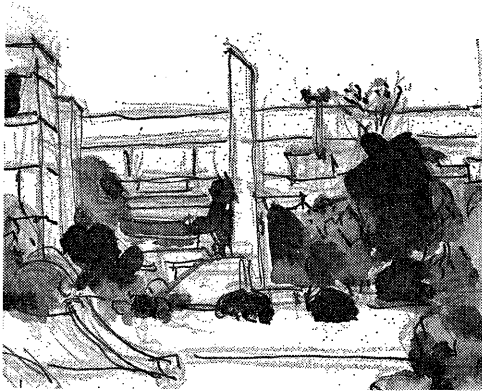
処女ジャンヌ・ダルク

彼女が突如として出現し、直ちに挙げられてフランス軍の将帥となり、忽ちのうちにオルレヤンの攻囲を解き、フランス方の頽運を挽回するに至った奇蹟的史実は

広く知られている事でもあり、其幾分かの面影は、当時の僻見で歪められてはあ
るが、本劇中にも映出されているから、絮説を省く。斯くてオルレヤン攻囲の失敗以
来、イギリス方は連戦連敗して、其勢力年と共に萎靡し、一四三五年に摂政ベド
フォードが死んだ後は、大陸即ちフランスに於けるイギリス領は相次いでフランス
軍の為に侵略された。其結果、一四四四年に二年間の休戦条約が締結され、其翌年
にはアンジュー公ルネー（本劇のレーニエー）の女マルゲリート（本劇のアンジュ
ー公主マーガレット）が迎えられてヘンリ六世の妃となった（時に齡十七歳）。精悍
な、覇気に富んだ、男勝りの婦人であったことは、ほぼ本劇中に写された如くで、
初めはサッフオーク公、後にはサマセット公と結託して、柔弱な王を左右し、専ら
フランスの為に有利な政策を行わしめなどして、さらぬだにヨーク、ランカスター
両王党の根深い争因の伏在していたところへ、更に反党争の種子を蒔いた。

要するに、此第一部に叙写されてある一切は、いわば、本劇の序曲即ち発端たる
に過ぎないのである。勿論、正史通りではないが、流石に此一篇のうちに英国史上
に「紅白薔薇戦争」として知られている永年期に至った大内乱の予兆だの、ランカ

スター系統衰亡の由来だの、大貴族らの跋扈、確執、就中、王の近親たり補弼たる輩までが、偏に私心を専らにして相軋轢する有様を巧みに緊縮し描写し得ている点は、第一部の興味でもあり価値でもある。



田辺謙輔画

(い) 薔薇戦争（一四五五—一四八五）

英仏の百年に亘る大きな紛争の結果は、英国民が自国政府の弱体と軽率さに対する憤慨となって爆発した。

サフォークは、弾劾^{だんがい}され、海を渡って逃亡の途中に殺され、チチェスターの司教は、アンジウの割譲交渉を既にしてしたが、民衆に捕えられて八ツ裂きにされた。

当時製造工業の地区として活況を呈していたケント州では、五港（ヘースティンズ、ロムネー、ハイス、ドウヴァー、サンドウィッチ）の海賊行為によって、特にフランスとの戦に関係があったため、自由民や小売商人の人達が憤慨して一揆を起し、多数のサセックスの郷士や紳士、それに二名の大地主、バトルの大修道院長及びリヴスの小修道院長が公然とこの企てに賛成した。

フランスとの戦争で可成経験のある軍人のジョン・ケードが彼等の長となり、今や同志二万人を数えるこの部隊は聖霊降誕節に、ブラックへ向かって行進した。

ケント州の庶民が王立評議会に提出した告訴は、庶民の実情を知る上に非常に価値がある。異端視されたウィクリフ主義が一掃されたため、宗教的改革の要求はさ

れなかった。旧来の社会的不満はどうやら、静まったらしい。

一三八一年にケント州を死物狂いに蜂起させた農民の土地保有や農奴制の問題は、一四五六年の告訴には何も出て来ない。その間の七十年間に、農民制度は社会の變化以前に自然消滅した。

評議会が告訴の取り上げを拒否すると、セブンオークスで、王室軍がケント州民と戦って敗れた。そしてロンドンの占拠と、国務大臣中、最も不評判だったセイ卿の処刑とが重なって、彼の同僚達の頑固な態度が一変した。それで、その告訴は認められ、蜂起に加わった総ての連中が赦免され、暴徒達が帰郷したので、例のケイドが再び彼等に武器を取らせようとしたが失敗し、逮捕を免れんとして、サセックス州へ逃げ込んだが、斬られてしまった。この革命の首領が死んだので、流血の報復が尚続いたが、例の告訴は静かに片付けられ、特に失政の責任者と見なされていたソマセット公が王立評議会の首席に納った。

ジョン・オブ・ガントの子孫たるソマセット公ボーフォート並びに彼の妻キャザリン・スウィンフォードはランカスター家（赤薔薇党）の分家代表で、ヘンリ四

世が即位している。今やヘンリ六世に世継がないので王位への望みが出来た。ヨーク公（白薔薇党）が起上ったのは彼等の意図を察知したからだ。

彼がこれまで督促を控えていたその他の要求に加えて、ラングレイのエドマンドの子孫としてエドワード三世の五男を王位の推定相続人として認めることを要求した。彼の要求が評判が良かったのは、国王の御病氣中、このライヴァルの争いが中断されたためだった。